

弥生時代は、米作り等の農耕が本格的に始まった時代です。妻木晩田遺跡からも炭化した米や稲の収穫に使う石包丁という道具が出土しているため、この弥生人も米を食べていたと考えられます。

現在は大型機械により稲の根元から一気に刈り取りますが、弥生時代はどのようにして稲の収穫をしていたのでしょうか。専用の石器の2つの穴にひもを通して指にかけ、稲の穂先だけをつみ取って使っていました。この収穫方法は、「穂首がり」といって、稲穂をむしるように切り取っていたと考えられています。妻木晩田遺跡でも、日野川流域で採集できる緑色片岩等をみがいてつくられた石包丁が出土しています。



淀江平野から石包丁と同じ目的で使われた包丁が見つかっています。その材料となったのは、次のうちどれでしょう。

- ①木 ②鉄 ③銅 ④ねん土 ⇒ ()

石包丁の製作工程は、大阪府池上曽根遺跡等で明らかになっており、その手順でつくっていきますが、本来使用された石材を使うと製作に時間がかかるため、やわらかい石を使って体験します。

チャレンジしよう

「石包丁づくり」に挑戦しよう！

【準備】滑石、糸のこぎり、ドリル、金やすり、と石、紙やすり



①石にえん筆やペンなどで輪かくと穴を開ける場所を書きます。



②ドリルを使って穴を開け、糸のこぎりを使って、大まかな形を切り出します。



③手になじむように、金やすりで形を整えます。



④と石でといで、刃をつけます。



⑤細かい目の紙やすりで全体をみがきます。



⑥ひもを通して完成です。

弥生の人々は、自分たちの暮らしに合うように道具を作り、改良を続けてきました。石包丁はその一例です。他にも石器、木製品、鉄器、青銅器等たくさんの道具が作られています。このガイドスしせつにもたくさん展示してあります。調べてみましょう。

豆知識 1

弥生時代の石包丁の作り方

(出典 大阪府立弥生文化博物館編2001『弥生都市は語る』より)



1 石をあら割りします。



2 大きく打ちかいて、厚みをとります。



3 細かく打ちかいて、形を整えます。



4 表面をみがきます。



5 穴を開けて完成です。

同じ方法で鳥取県産の粘板岩を使って石包丁を作ってみました。



粘板岩をうすく割り、石ではしを打ちかいて形を作ります。と石でとぎ、マイギリで穴を開けて完成です。

豆知識 2 なぜ、穂首がりをしたのだろう？

現在の稲かりは、根元から取り取る「根がり」が行われています。しかし、弥生の人々はなぜ、穂首がりを行っていたのでしょうか。それは、当時の稲は同じ場所・同じ時期でも、稲穂の実る時期がばらばらで、一度の収穫に適していなかったからです。そのため、弥生の田畑では、採り入れに適した稲穂だけを選んで穂先をかり取ったのです。その後、稲はさいばい技術の進歩や品種改良によって、ほぼ同時期に実をつけるようになったので、根がりによる収穫が可能になったのです。

豆知識 3 妻木晩田遺跡で見つかった石包丁と

淀江平野で見つかった木包丁



石包丁



木包丁 (下は復元)

木包丁は、かたい木材のケヤキ製で、木目を上手く活用して作られており、木質のかたい部分がのこぎりの歯のようになるようになっていいます。弥生人のちえはすごいですね。

※みなさん、よく切れそうな石包丁ができましたか？ 今日「石包丁作り」体験で発見したことやわかったこと等、感想をまとめてみましょう。

.....

.....

.....

.....